

ウエノテクニカ

「若い技術者が心身を鍛えられる。世界に通じるエンジニアを育成する上で『マイルストーン』。ウエノテクニカ（群馬県桐生市、0277・52・0546）の松井真二社長は、技能五輪をこう位置づける。親会社のヒロテック（広島市佐伯区）が参加する関係で2008年に初出場。初陣で敢闘賞を獲得してから6大会連続で、機械製図で敢闘賞を獲得した。若い技術者が成長する舞台に活用し、会社の技能高度化に役立っている。

入賞者を多く輩出する同社でも、技能五輪の訓練に割ける時間は大手企業と同様とほいかない。同社では県予選を踏まえ出場選手が

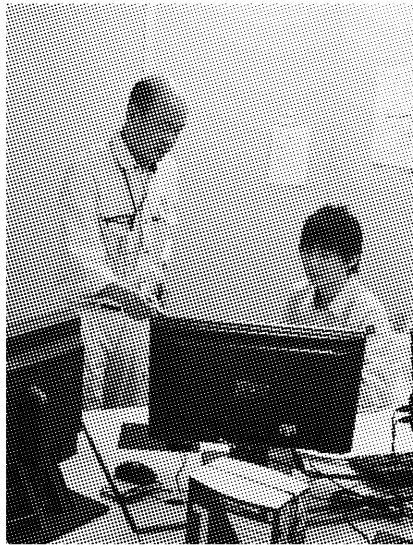
育成へ 技能者 トップ

わが社と技能五輪

あいち大会

6

実務で磨いた経験値武器に



選手を指導する吉原DL

内定する6月くらいまでは通常業務。その後半日程度、技能五輪向けの訓練を行い、大会2カ月前になつて訓練に終日励む。

指導を統括する技術開発本部SI開発ディビジョンの吉原明彦（ディビジョンリー



現場にも触れる。この実務での経験値が武器になる。実際、08年の大会では3次元のモデルを作製した上

で、2次元の製図をつくる手順を実施。3次元設計を行っており、通常の仕事のやり方を競技に持ち込み、成果につながった。

初出場での受賞は職場の意識を一変させた。出場前は技能士がゼロだったが、09年から技能検定を受ける技能士が増加。現在は設計部門……

選手は実務の延長線上で訓練する

で技能士の割合が半数以上を占めるように、全社的に意欲が高まった。技能五輪が選手個人の成長に加え、会社全体の活性化をもたらした。松井社長も「彼らの力が収益に直接結びついている」と話す。

人材育成に機能している技能五輪。ただ、メダルは目標であって彼らのゴールではない。見据えるのは世界に通用するエンジニア。吉原DLは「技能五輪から戻った時に、能力を生かす職場がないと意味がない」と言い切る。「活躍の機会を与えて、個性を伸ばしてあげるのが重要だ」

（同）と強調。技能五輪を挟んでの成長にも力を注ぎ、理想とする技術者像を追い求めていく。

日刊工業新聞は技能五輪全国大会を応援しています。